

### キャリア支援を考える 10 : 学校の熱意は地域が知っている

Kawakita, Takashi / 川喜多, 喬

---

(出版者 / Publisher)

教育新聞社

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

教育新聞 / 教育新聞

(号 / Number)

2584

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

7

(発行年 / Year)

2005-11

# キャリア支援を考える

—10

千葉黎明高校を訪問した。千葉マリスタシアムの3倍の面積がある広大な敷地といえ

ば、すぐにわかるように、もとは農業高校だ。明治時代に他の者

たちが諦めて去ったあとも畝を振るい続けた開墾者の志を継ぎ、西

村繁が大正12年に八街農林学園として開校。開校時には創立者が地

域の農家を尋ねて歩き、農業に学の必要なことを説いて聞かせた

という。学問だけをやらせたいのではない。実業のために学問をや

れというわけだから、言葉はなかつたがキャリア支援である。

最近、多くの高校・短大・大学が定員割れしては大変と教職員を

あちこちに旅立たせているが、果たして自分

の学校で教える学問が本当に将来役立つと信じている者、いかほどありや？（こんなことやらされるイヤな時代に「なってねえ」と学校説明会の控え室で大声で叫んだ某大学教授を私は知っている。）

だが、将来役立つとは、私は実は広い意味で捉えている。

たとえば同学園創始者の西村翁は、開校と同時にフランスバンド

チームを作った。スクールバンドとしては日本初だという。当

然、子弟に音楽を学ばせる余裕など、地方の農民にはなかつたであ

ろう時代である。この伝統は今に続く。

今でも地元の人の中には音楽器を吹ける者がいる。孫世代とも

もに行事になると参加して、昔話をする者が

いるという。地域に生きて豊かな生き方をす

法政大学キャリアデザイン学部教授

川喜多 喬

## 学校の熱意は地域が知っている

「コミュニティの人づくりもまた、キャリア支援なのである。」

老人たちとの交流は農学校から出発し、現在でも生産ビジネス学科を有する同校では、

カーテニングなど農家以外のサラリーマンな

どの老後の楽しみのために様々な教室を開放

している。また、生徒が作った野菜果実は地

域の人々の口に入る。作ったものは食べるか

売れ…（当然だろう売れるかどうかかわらない

知識を頭に詰め込む普通教育よりは、はるかに

言った生徒に作らせるものは無農薬。ゆえに

地域の人は学校のイベントに喜んでやってきて

て戻って帰る。

学校に成る銀杏からタケノコまで売って資金稼ぎをしているのが

「工学部」。大学の工学部ではない。工学の

クラブであるが、手作りの電気自動車レース

に毎年のように出場。毎年全国の競技でトッ

プクラスの成績をあげている。町のお祭りな

どもにも出てスポンサーを探し、レーシング

カーにはスポンサーの名前をつける。職業訓練である。ともかくカ

ネを稼ごう、生活を成り立たせようという職

業ではない。自分たちの夢のための資金集めの訓練だ。かつそれは

技能の成長と知識の獲得を伴うのである。

同校では大学や専門学校への進学の間でも

面白い工夫をしている。地元の中・高3年生の生徒に高校3年生への合同進路説明会を公開しているのである。その一つ先のキャリアを考えて次のキャリアを考えるキャリアデザインは、ほとんどない。